

# 慧心光

Echo No.146  
平成29年秋彼岸

院寺寺寺  
峰福林禅  
一禅禅宗  
\* \* \* \*  
羽村臨濟会

## 今年の夏をふりかえる

気候変動の激しかった夏、十六日間連続の雨、その中で八月五日には、羽村とろう流しの第三十五回が、禅福寺田島和尚の導師のもと、挙行されました。

個人的に私にとって、今年の夏は特別のものとなりました。七月五日から九日間のイスラエル巡礼、八月六日の長野松本の浅間温泉、神宮寺さんの第二十回目開催の原爆忌への表敬訪問。五月二十七日に宗禅寺の住職を和正和尚に譲ったので、責任を若和尚に託してできたことです。

イスラエルに行ったのは、鎌倉のカトリック雪の下教会の山口神父さんからのお誘いによります。鎌倉では宗教者会議といって、神道・仏教・キリスト教の三者が三・一一の追悼復興法要、各宗教の勉強会、相互交流の集いを行っています。交流の中から、キリスト教のミサやイエ

スキリストそのものを現地イスラエルで体験し、この眼で確かめたくまりました。

テルアビブから若いキリストが伝道布教に励んだガリラヤ湖周辺、山上の垂訓教会(狭き門より入れ、求めよされば与えられんの教会)やパンと魚の教会、ユダヤ教の会堂跡を見て、カナやナザレの受胎告知教会、死海の浮遊体験、マサダ、クムラン、そしてエルサレムのキリストが十字架を背負って歩いた道、ヴェルツヘムの生誕教会などを巡拝してきました。

キリスト教とイスラム教は共にユダヤ教の中から生まれています。ユダヤ民族・アラブ民族・ゲルマン民族など、宗教と民族の混淆を見せられました。緊張の中の平和、何かあると暴力事件が起きそうです。ただ観光客が直接被害をうけることはなさそうでした。

神宮寺さんの原爆忌は以前から行きました。丸木位里、俊夫妻作の「原爆の図」十五部作から「幽霊」と「灯籠流し」が、

「沖繩戦の図」から米軍が初めて上陸した読谷村の「残波大獅子太鼓」の計三作品が本堂に展示され、その中で金城実さんと高橋住職の対談を間近に見聞しました。特に、沖繩が受けた地上戦のことが心にのこりました。兵隊だけでなく、沖繩の住民が否応なく戦に巻き込まれ、悲惨な体験をさせられました。この事は、沖繩の人にしか解らないものです。本土や内地にいる人達の戦争体験とは比べようのないものです。沖繩が受けたこの事実を、私たちはしかと見つめなければいけないでしょう。

イスラエルのユダヤ教、イスラム教、キリスト教、そして民族の対立。この中からだからこそ、平和が切実に求められるのだらうと思います。日本の場合は、終戦記念日・原爆・沖繩から平和への意識が求められます。

この地には「横田基地」もあります。北朝鮮とアメリカとの対立もますます激しくなってきました。

戦後七十二年、日本は与えられた平和のおかげで発展し、豊かな生活を送ることができました。今こそ、世界中で平和が希求されています。地上戦の苦しみをしっかり受け止めるからこそ、平和の有り難さと維持が必要になってきます。与えられた平和を保つために何をしなければいけないのでしょうか？

(宗禅寺 高井正俊)

# 白隠禪師坐禪和讃を

## 読んでみる その九

辱（かたじけ）なくも此の法（のり）を  
一たび耳にふるる時

贊嘆隨喜（さんたんずいき）する人は福  
を得（う）ること限りなし

（白隠禪師坐禪和讃より抜粋）

### ◆意 訳

有り難いことにこの教えを

一度でも耳に触れる機会をいただき

深く信じて受け入れられる人は

必ず幸福を得ることでしょう

### 純一無雑の心

「じゅんいつむざつ」あるいは「じゅんいつむぞう」と読みます。雑味がなく  
純粹一途な心の姿を表わしている言葉で  
す。私が三島瀧澤寺でお世話になった亡  
き死活庵中川球童老師が、入門当初の私  
に口を酸っぱくして言い聞かせて下さつ

た言葉でもあります。「ええかい、修行の  
第一歩は純一無雑からじゃぜ。先輩から  
言われたら、はい！と、返事して、余計  
なことを考えずに言われた通りにやるんじ  
や」。聞かされていた当初は、そんなに何  
遍もおっしやらなくても思っていました  
たが、日々を過ごすうちに老師の言葉の  
重みを感じるようになりました。

### 人生の出会い

我々の日々の生活の中には必ず出会い  
があります。皆様が自分の人生を振り返  
ってみても、「この出会いが私の人生を変  
えた」と思えるものが必ずあるのではな  
いでしょうか。そして、その出会いは人  
間同士の出会いばかりではないように思  
います。白隠禪師にとっては一枚の地獄  
絵図がそうであったように、絵画や音楽、  
一冊の本、普段何とも思ってたなかつた両  
親や友人の何気ない一言や非日常的な場  
所での体験など、その出会いは人によつ  
て様々だと思えます。もしかすると、我々  
は自分の人生を変えるようなものに出会

っていないながら、それに気づいていない場  
合もあるのではないのでしょうか。

私は親戚でもある、市内の禅林寺様か  
らの御縁で宗禅寺にやってきました。初  
めて禅林寺様にお会いしたのは、母方の  
祖母の葬儀式のことだったように記憶  
しております。そのときは私も中学生で  
したので、普段あまりお会いしない親戚  
の方という認識しかありませんでした。

まさか、このような深い関わりを持つこ  
とになるとは思ってもいませんでした。  
出会いとは分らないものです。

### 人生は一瞬で変わる

白隠禪師は一たび耳にふるる時、つま  
り我々が初めて出会った時に贊嘆隨喜で  
きる心の状態にいるのかどうかを我々に  
説いて下さっているように思います。日  
頃から自分の心を常に純一無雑にしてい  
れば、つまらない観念に縛られることな  
く、素晴らしい人生が待っていることを  
伝えて下さっているような気が致します。

（宗禅寺 高井和正）

# 禪と共に歩んだ先人

## 松尾芭蕉 VI

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き江戸時代前期に生き、日本の俳諧(俳句)を芸術的域にまで高め大成させた「俳聖」とも呼ばれる「松尾芭蕉」についてお話させていただきたいと思えます。

### 「野ざらし紀行」続き

芭蕉はその生涯において多くの紀行文(旅に出てその土地の文化や風習などを紹介する文)を残していますが、その最初となるのが、この「野ざらし紀行」でした。旅立つにあたり禪的悟りを得んと覚悟し、実際この旅程で芭蕉の作風が除々にかわっていき、のちに「蕉風」と呼ばれる事になる自らのスタイルを確立さ

せたという事。また「物我一致」という境涯を得て、それが作風の変化に大きく寄与したと前回述べました。「物我一致」とは「物(自分以外のもの、つまり対象)」と「我」を分けない、つまり「無分別」の境涯をいいます。無分別とは自分の無い状態、つまり無我の境地でそこに物だけが残る、自らが物になりきる。これが「物我一致」の境涯です。

### 海暮れて 鴨の声 ほのかに白し

これは尾張(現代の愛知県東部)の海を見て詠んだ句です。五・七・五が俳句の定型ですが、これは五・五・七と破調となつています。定形通りとすれば「海暮れてほのかに白し鴨の声」となり、これでも良い句といえそうですが、これでは白いのは鴨の声となつてしまいます。実際そう解釈する向きもあります。詩人的表現によつて鴨の声を視覚化したものとする解釈です。しかしそれではあえて破調にする理由が無くなつてしまいます。「海暮れて」と入り、すぐに「鴨の声」

と来る事によつて聞き手はクーツクーツという鴨の鳴き声を思い浮かべます(鴨の姿では無い)。さらにそこで「ほのかに白し」と来る事で聞き手はうすぼんやりとした白色を脳裏に浮かべます。この順で詠む事により、うすぼんやりとした霞の中からクーツクーツという鴨の声が聞こえて来る情景を表現したと考えるべきかと思えます。そう考えた時に上の句の「海暮れて」は状況説明的なもので分別的になります。が、「鴨の声」はまさに「鴨の声」でしかなく、「ほのかに白し」もまさにそれだけになります。芭蕉自身クーツクーツ、という声になり、また白になりきつた無分別の境涯を詠んだものと思えます。先に著した「海暮れてほのかに白し鴨の声」では分別から離れられず、その状況にいる芭蕉自体を想像させられますが、その違いにこそ、芭蕉がこの旅で得た「物我一致(一智)」の境涯を感じます。 以下次号



# 禅寺雑記帳

◆早くも秋のお彼岸となりました。二ヶ月表示のカレンダーは、あと一回しかめくることが出来ません。終わりよければすべて良し、二〇一七年は良い年だったと振り返られるように、残りの日々を大事に過ごして行きましょう。

◆今年の夏は本当に異常気象で、日本でも世界でも記録的な豪雨による甚大な被害が多発しました。被害に遭われた方々には心よりお見舞いを申し上げます。

◆八月の東京都心は日照時間が史上最短だったとの事。雨が降らなかつた日が四日しかなく、農作物への悪影響や、レジャーなどで期待された消費が見込めなかつたなどの被害も相当だと思えます。夏は夏らしく、適度に暑くあつて欲しいとつくづく感じました。このお彼岸は穏やかな、良い秋でありますように。

◆とはいっても、豪雨や地震といった天災は人間の力ではどうしようもなく、仕方がないとあきらめるしかありません。しかし人の頭越しにミサイルを打つて来る独裁者による人災は勘弁してほしいものです。ミサイルの実験が上手くいくとは限らず、途中で落下する可能性もありますし、飛行機や漁船にぶつかる事も考えられます。何があつても責任を取るつもりも反省の言葉も無いことでしょう。あの行動で、国民が幸せになれる筈がありません。誰が得をするのでしょうか。

◆来年開催されるサッカーのワールドカップ決勝大会に、日本が堂々と進出を決めました。自分が勝つたように嬉しく思えます。文明のある現代、戦争によって命を奪い合う愚かさを捨てて、国と国はスポーツによって正々堂々と戦つて欲しいものです。

◆決勝大会進出を決めたオーストラリア戦で二点目のゴールを決めた井手口選手は、二十一歳の若さですが既婚で、娘さ

んもいるそうです。奥様の母親が病気で余命半年と宣告された際に、安心させる為に結婚したとスポーツ紙にありました。

◆井手口選手は「嫁と娘は俺が守る！という気持ちはでかい。自分のために、というより、誰かのための方が頑張れる」と語つたそうです。さすが日本の代表、人柄も素晴らしいではありませんか。

◆誰かの為にと頑張ることが、すなわち自分の為になる、これは仏教の『自利利他』です。自分を高めれば、他人や世の中に対してより役に立つ事が出来るのです。

◆先の井手口選手の活躍は、亡くなられたお義母さまにとって本当に誇らしく、何よりの供養になった筈です。お彼岸は先祖を敬い、自分を高めて今日命のある事に感謝を捧げる仏教徒にとって大事な期間です。私達はそれぞれ、生きている限り先祖の「代表」です。相応しい生き方をしているか、この期間に見つめていきましよう。

(禅林 恭山)